

カリキュラム改革についての報告

—自己理解・他者理解系科目—

田 中 泉

1. はじめに

本稿の目的は、2013年度に開催された「カリキュラム・コーディネート会議」（以下、「CC 会議」と略記する）で議論され、2015年度より教育改革の一環として実施されている新カリキュラムの中で、英語や日本語表現と並んで重点の1つであった自己理解系科目と他者理解系科目について、その内容および実施状況を報告し、そこから見える課題を明らかにしようとするものである。

CC 会議では、まず、石田恒夫理事長から「広島経済大学の学生には、日本と世界の歴史や地理に関して基本的な知識を身に付けて卒業させたい」という希望が示された。そこで、CC 会議では、社会のグローバル化が進む時代において、世界に関わることを知ることは必須であるが、世界に関わることを正しく理解し認識するためには、同時に、比較対象の上でも日本に関わることも理解しておく必要があるという議論があり、日本に関する内容の「自己理解系科目」と世界に関する内容の「他者理解系科目」という2つの科目群を設定することになった。この結果を受けて、CC 会議委員であった福居信幸経済学科主任と松井洋一ビジネス情報学科主任と筆者の3名でワーキンググループを構成し、それぞれの科目群ごとに学生に履修させる科目と履修条件を検討することになった。

ワーキンググループでは、自己理解系および他者理解系のそれぞれで後述する10科目を設定し、それぞれで3科目の単位取得を卒業認定要件とす

ることが決まった。10科目中3科目が多いのか少ないのか議論があったが、合計6科目で12単位は、卒業認定要件が30単位以上となっている共通科目のうちの4割で、英語・日本語の必修科目の合計10単位、その他の選択科目8単位と比較してバランスが良いとの判断であった。

結論的に言えば、学生にとっては、両系の科目を3科目ずつ履修することが1年次からの目標となり、履修者数が多くなった原因になったと推測される。以下、まず科目内容を紹介したのち、2015年度および2016年度の履修状況を示し、分析・考察する。

2. 自己理解系および他者理解系の科目内容

そもそも、日本及び世界の地理や歴史の科目を選択必修科目として、できるだけ学生たちに学ばそうという発想は、現行の高等学校学習指導要領（平成21年3月公示）で、地理歴史科においては、世界史（AまたはB）が必修である一方、日本史および地理については選択科目となっていることが背景にある。多くの高等学校では、必修科目である世界史を2単位である「世界史A」で1年次に履修させ、2、3年次には生徒の進路希望に従って日本史Bまたは地理Bのどちらか一方、あるいはその両方を履修させている。この結果、「世界史A」は近・現代史の学習が中心で、古代・中世についてはごく簡単な流れだけを学習するにとどまり、また、日本史と地理についても、選択しなかった方の知識は、中学校社会科のレベルにとどまることになった。こうした状況は、平成元年版学習指導要領で高等学校社会科が解体され、地理歴史科と公民科に分割されて以降ずっと続いている。現在のおおよそ40歳以下の人たちの学校で学んだ地理や歴史についての理解は、世界史、日本史、地理のすべてを履修することが一般的であった世代の人たちと比べて少ないと考えられるのである。

以下、2015年度のシラバスから、それぞれの科目群に含まれる科目の授業内容・目標をまとめて紹介し、その特徴を述べる。

【自己理解系科目】

科目の名称	授業の内容・目標
日本の歴史 Ⅰ	旧石器時代から戦国時代にいたる日本の歴史を概観する。各時期の政治・外交・社会の重要な歴史的事件・事象を中心に解説をおこないつつ、基本的な歴史の流れと特色を理解できるよう講義し、同時に、新資料の発見や歴史研究の進展などによって新たに指摘されている視点も取り入れつつ、歴史的な理解も深める。
日本の歴史 Ⅱ	江戸時代から明治時代前期にいたる日本の歴史を概観する。各時期の政治・外交・社会の重要な歴史的事件・事象を中心に解説をおこないつつ、基本的な歴史の流れと特色を理解できるよう講義し、同時に、新資料の発見や歴史研究の進展などによって新たに指摘されている視点も取り入れつつ、歴史的な理解も深める。
日本の歴史 Ⅲ	明治時代中後期から現代にいたる日本の歴史を概観する。内容的には、各時期の政治・外交・社会の重要な歴史的事件・事象を中心に解説をおこないつつ、基本的な歴史の流れと特色を理解できるよう講義し、同時に、新資料の発見や歴史研究の進展などによって新たに指摘されている視点も取り入れつつ、歴史的な理解も深める。
広島県の歴史 と文化	古代から現代までの広島県の姿を特徴的に理解する。古代においては山陽道の通過点であった場所が、中世を通じて武家支配となり、戦国時代には毛利氏の城下町として発展し、近世には浅野藩四十二万石の支配拠点となったこと、幕末から明治初期においては倒幕と新政府成立における役割、明治中期から第二次世界大戦までの「軍都広島」および「移民県」としての役割、第二次世界大戦末に投下された原子爆弾による被害およびその後の影響、戦後の平和都市建設の歩みを明らかにする。
日本の思想 と文化	まず日本の思想の源流を探り、それぞれの時代をリードし共に生きぬいた思想を考えることで、日本に暮らす我々にとって、思考の基盤となるものの考え方を理解し、実際の生活や自分の将来において役立つと思われる知識を身に付ける。
日本の宗教	日本の宗教の多様性に注目し、歴史的な経緯を踏みつつ、神道、仏教、儒教を見て行き、日本人の多くが、色々な宗教を受け容れつつ、その複合体として調和させ、自然な生活を営んでいられる理由を考察する。
日本の地理	日本各地域の地理的な特徴と日本におけるその地域の位置づけを概説し、なぜそのような特徴・位置づけが成立したのかを歴史的背景もふまえながら科学的に考える。また、各地域が現在どのように変貌しているか、その原因はどこにあるのかを理解する。
日本の法律	法の歴史、分類、適用方法などの基本的な事項を学んだ上で、我々が社会で生きていくためのさまざまなルールについて具体的事例を交えつつ多面的に捉える。

日本の政治	戦後史において必ず言及される言葉で、1955年に始まる自民党の長期政権による「五五年体制」期を中心として、戦後から現代までの出来事を「通史的」に解説するかたちをとりながら、現在の日本がいかに形成されてきたのかを考える。その中で、現在の私たちが直面する様々な問題の「起点」を意識したテーマに光を当てる。
日本国憲法 Ⅰ	日本国憲法の内容を解説し、憲法における基本的人権の基本理論及び代表的な判例を体系的に学び、できるだけ具体的人権に触れながら、日本国憲法をめぐる生じている人権保障の問題を紹介し、検討する。
日本国憲法 Ⅱ	日本国憲法の内容を解説し、憲法における統治機構の基本理論および代表的な判例を体系的に学び、身近で具体的な話題を課題にし、この日本国憲法を支えてきた「統治機構」について考える。

【他者理解系科目】

世界の歴史 Ⅰ	文明の誕生から、地域世界の成立と古代帝国（ローマ、マウリヤ朝、漢）、地域世界の再編（ヨーロッパ、南アジア、東アジア）、ユーラシア世界の成立、世界の一体化の始まりまでの世界の歴史を扱う。細かい歴史事象にこだわることなく、グローバル・ヒストリーの視点から大きな流れを認識する。
世界の歴史 Ⅱ	18世紀に生じた環大西洋革命から、19世紀の自由主義、帝国主義、20世紀に起こった2つの世界大戦と戦後の「冷戦」・「熱戦」を経て、冷戦後の現代世界を扱う。細かい歴史事象にこだわることなく、グローバル・ヒストリーの視点から大きな流れを認識する。
世界の思想 と現代社会 Ⅰ（アメリカ）	現在のアメリカ人の世界観・価値観を理解するために、アメリカ人の宗教的伝統を検証しつつ、それが現在のポピュラー・カルチャーや政治社会の分野においてどのように表れているかを確認し、それがどのように形成されてきたかを考察し、アメリカをより深く歴史的に理解する。
世界の思想 と現代社会 Ⅱ（ヨーロッパ）	現在の社会や世界の情勢を理解するため、ヨーロッパの政治的な協調・統合の取り組みと国家間の対立の背景、2回の世界大戦の影響、冷戦期から今日までの欧州統合の歩みを振り返り、「ヨーロッパ」が人類の歴史の中でどのように位置づけられ、どのように変容してきたのかについて考察する。
世界の思想 と現代社会 Ⅲ（東アジア）	儒教・仏教・道教の伝播の概略と、東アジア世界を強く規定することになった儒教の世界観（中華思想）、近代以後、欧米諸国との接触で、儒教の世界観が矛盾を来し、旧来の思想がどの程度残り、また外来の思想がどのように受け入れられ、両者がどのように現在の中国社会に影響を与えているのかを理解する。

世界の思想 と現代社会 Ⅰ（西アジア）	中東世界が「9.11同時多発テロ」以降、アフガン戦争、イラク戦争、「アラブの春」を経て、現在も「イスラーム国」など混乱と激動の中にあり、どのような問題や課題を抱えているのかを理解するために、まずここに暮らす人びとの民族や宗教・宗派について理解を深め、その上で近代以降現在までの歴史を概観する。
世界の宗教	現代の世界を理解するために、世界のおもな宗教（ユダヤ教、キリスト教、イスラーム、ヒンドゥー教）の教義および成立・発展の過程、現代の信仰状況について、基礎的な知識を習得する。
世界の地理 Ⅰ	アジア・アフリカ・オセアニアの地域的特徴並びに日本との関係を理解し、それらの地域に関心を持つとともに、グローバル化の進む現代社会において私たちの生活と世界の様々な地域が密接につながっていることを理解する。
世界の地理 Ⅱ	ヨーロッパ・アメリカの地域的特徴並びに日本との関係を理解し、それらの地域に関心を持つとともに、グローバル化の進む現代社会において私たちの生活と世界の様々な地域が密接につながっていることを理解する。
世界の憲法	世界の主要国が、具体的にどのような内容の憲法を作っているのか、そして、その憲法の下で、どのような政治・経済・社会体制を整えているのか、また、基本的人権の保障、国民主権と民主主義、権力分立、法の支配など、20世紀後半以降の多くの憲法が共通の目標として掲げている原則についてという点について理解する。

以上の科目群の中でユニークと思われるのが、自己理解系科目の1つである「広島歴史と文化」である。この科目は、せっかく広島の大学で学ぶのであるから広島歴史や文化をもっと知ってもらいたいという発想から設置された。広島出身の学生であっても、小学校社会科でごく簡単な歴史を学んだり、原爆について平和学習の中で学んだりしたことはあっても、古代から現代までの通史や、とりわけ江戸時代の社会経済や明治時代の移民史や軍事史などはまず学ぶ機会がなかったと推察されたからである。そこで、以下のような内容で科目を構成した。

- 第1回 オリエンテーション (田中・濱田)
- 第2回 古代の広島 (濱田)
- 第3回 中世の広島 (1) 平安～鎌倉時代 (濱田)
- 第4回 中世の広島 (2) 室町時代 (濱田)
- 第5回 中世の広島 (3) 戦国時代前半 (毛利氏の勃興) (濱田)
- 第6回 中世の広島 (4) 戦国時代後半 (毛利氏による領国支配) (濱田)
- 第7回 近世の広島 (1) 江戸時代前半 (福島氏、浅野氏の支配) (濱田)
- 第8回 近世の広島 (2) 江戸時代後半 (社会・経済の発展) (濱田)
- 第9回 近世の広島 (3) 幕末から明治維新 (濱田)
- 第10回 近代の広島 (1) 軍都廣島の発展 (日清戦争から日中戦争にかけて) (田中)
- 第11回 近代の広島 (2) 移民県広島 (ハワイ官約移民を中心に) (田中)
- 第12回 近代の広島 (3) 原爆投下の背景・その実態 (多賀)
- 第13回 近代の広島 (4) 原爆による被害状況 (多賀)
- 第14回 現代の広島 (1) 平和都市ヒロシマの建設への取り組み (多賀)
- 第15回 現代の広島 (2) 中国地方の中核都市としての広島の発展 (田中)

第2回～第9回を担当する濱田敏彦教授は、日本近世史の研究者であり、特に広島県内の農村社会について詳しい。また、第12回～第14回を担当する非常勤講師の多賀俊介氏は、もとは高等学校地理歴史科の教員であったが、現在はピースボランティアとして広島を訪れる観光客に原爆関連のことをガイドしておられる。筆者は広島から海外への移民史を研究しており、第11回「移民県広島」を担当しているが、第10回「軍都廣島の発展」も担当したのは、明治初期以降広島市が軍事的拠点となって発展したことが、広島から多くの移民が発生した理由の1つとなっており、移民史との関連から研究しているからである。

第10回では、広島に、明治初期に設置された鎮台を基礎にした第五師団が編成され、宇品築港と山陽鉄道の開通により日清戦争開戦時に東京から大本営が移されたことで、明治天皇が滞在し事実上の首都となったこと、またその結果、広島には軍事施設ができて、義和団事件、日露戦争、第一次世界大戦などを通じて大陸への出兵・兵站基地となったことで軍都として発展したことを講義した。授業では、当時の広島市の地図を用いて陸軍関係の施設があったことを理解させるとともに、現在も市内に残る施設の跡や碑の写真をパワーポイントで見せた。

第11回では、ハワイやアメリカ西海岸で見られる日本町や寺社、日本人墓地などの写真をパワーポイントで見せたうえで、明治中期に官約移民として始まったハワイへの移民やアメリカ本土への移民の中で、広島からの移民が全国で最も多くが含まれていたことを明らかにし、その理由を経済的、社会的、宗教的視点から理解させた。

「広島歴史と文化」を履修した学生たちは、どのような感想や意見をもったのだろうか。以下、筆者が担当した第10回と第11回の授業についてのみではあるが、感想を記述させた中からいくつかを紹介したい。なお、学生の名前はイニシャルで示す。

【第10回】

- ・日清戦争や日露戦争自体については知っていたが、広島がここまで深くかかわっていたというのは、初めて知った。明治27年には大本営が移転され事実上の帝都となっていたということも今日知ることができてよかった。また、なぜ、広島に原爆が落とされたのか、その原点が明治時代にあったのだと分かった。(Y・W)
- ・日清戦争中に天皇が広島に来たり、帝国議会を広島で開くなど広島の治療へのかかわりが深かったということがわかった。また、軍事施設も多く、陸軍墓地にも多くの人が葬られたりと重要な拠点だったのかと思った。
- ・陸軍墓地の話が心に残った。当時の兵隊は死ぬ場所どころか戻る場所すらも選べなかったと思うととても悲しい。ただ、フランス兵を手厚く看護し、その遺体を埋葬したことについては、日本というか広島への懐の広さを感じた。(R・T)
- ・広島でずっと育ってきて自分の身近に陸軍施設の跡があり目にしてきたことに驚いた。広島が戦争の記憶を物語っているんだなと感じた。(H・M)

【第11回】

- ・ 広島は海外と交流している印象があまりなくて、ハワイに移民がいたことも知らなかった。ハワイに親せきがいる人を知っているけど、このような歴史的経緯があったのかと納得した。(M・F)
- ・ 講義を聴いて言葉や文化の違う外国への移民がいかに様々な問題を引き起こすか分かった。今まで教科書や最近の新聞で「移民」という文を見ても特にイメージがわかなかったが、今日の講義で差別や困ること、また現地の人々がそう考える理由がよく分かった。(Y・I)
- ・ 広島県人がなぜハワイに移民しなければならなかった理由が分かった。月給が今の物価に換算するとかなり高額だったこと、耕地面積が狭かったこと、また宗教的理由から広島県からの移民が多かったことが分かった。(T・S)
- ・ 以前に「Picture Bride」という映画を見てあまり理解できなかったことが、今日の講義で移民の歴史を知って「なるほど」と理解できた。また、当時の日本人移民が苦勞しながらお金を貯めた未来を望んで生活していた風景が目につかんだ。(S・R)

3. 「自己理解系科目」および「他者理解系科目」の履修状況

以下、2015年度および2016年度に実施された「自己理解系科目」と「他者理解系科目」の履修状況について、それぞれの科目の履修者数を学年別にまとめてみる。その際、分析に必要と思われる実施曜日および時程も加える。(網掛け無しは前期、網掛け有りは後期実施の科目を示す。)

科 目 名	時程	2015年度						時程	2016年度					
		1年	2年	3年	4年	合計	1年		2年	3年	4年	合計		
日本の歴史Ⅰ-a	月・2	77	45	91	108	321	木・2	60	82	63	118	323		
日本の歴史Ⅰ-b	月・4	174	37	12	25	248	金・4	343	55	7	24	429		
日本の歴史Ⅱ-a	水・4	155	74	58	86	373	水・4	231	49	12	22	314		
日本の歴史Ⅱ-b	金・3	199	53	55	50	357	金・3	191	44	21	35	291		
日本の歴史Ⅲ-a	月・3	90	76	83	85	334	月・3	112	41	12	53	218		
日本の歴史Ⅲ-b	月・4	37	11	14	7	69	月・4	37	19	9	9	74		
広島県の歴史と文化	火・4	37	52	61	68	218	火・4	14	64	19	43	140		
日本の思想と文化	月・4	151	147	101	77	476	月・4	243	103	19	48	413		
日本の宗教	月・4	79	142	115	94	430	月・4	88	100	38	79	305		
日本の地理	木・2	68	56	82	126	332	木・2	72	77	35	53	237		
日本の法律	木・3	66	93	108	70	337	木・3	73	95	25	67	260		
日本の政治	金・4	217	56	37	64	374	金・4	163	71	19	35	288		
日本国憲法Ⅰ	水・4	198	122	28	45	393	水・4	287	99	10	43	439		
日本国憲法Ⅱ	水・4	129	85	30	33	277	水・4	218	82	30	26	356		
世界の歴史Ⅰ-a	金・1	116	8	14	30	168	金・3	85	67	6	11	169		
世界の歴史Ⅰ-b	月・4	32	14	8	19	73	月・4	121	106	10	28	265		
世界の歴史Ⅱ-a	金・1	66	27	14	14	121	金・3	99	86	7	20	212		
世界の歴史Ⅱ-b	月・4	30	3	4	2	39	月・4	41	77	4	8	130		
世界の思想と現代社会Ⅰ	木・3	196	78	69	81	424	木・3	235	227	22	66	550		
世界の思想と現代社会Ⅱ	火・4	41	16	16	15	88	火・4	23	122	23	33	201		
世界の思想と現代社会Ⅲ	水・4	54	16	11	18	99	金・4	49	78	7	13	147		
世界の思想と現代社会Ⅳ	集中	204	15	12	18	249	集中	217	85	4	15	321		
世界の宗教	木・1	133	22	23	40	218	木・1	150	74	4	31	259		
世界の地理Ⅰ-a	木・3	60	17	10	94	181	木・3	38	38	3	7	86		
世界の地理Ⅰ-b	木・4	120	69	52	54	295	木・4	202	164	12	83	461		
世界の地理Ⅱ-a	木・3	116	21	7	5	149	木・3	102	21	3	3	129		
世界の地理Ⅱ-b	木・4	303	65	54	97	519	木・4	319	164	40	58	581		
世界の憲法	木・3	5	2	2	2	11	木・3	3	50	1	2	56		
合 計		2897	1338	1066	1292	6593		3816	2340	465	1033	7654		
1科目当りの平均人数		103.5	47.8	38.1	46.1	235.5		136.3	83.6	16.6	36.9	273.4		
学生の人数(4月の時点)		665	645	750	936	2996		727	686	575	836	2827		
学生1人当の平均科目数		4.35	2.07	1.42	1.38	2.2		5.25	3.41	0.81	1.24	2.7		

①学年別の学生数と履修者数の関係

新カリキュラムの1年目である2015年度は、総学生数2996名に対し両科目群の履修者数が合計6593人で、1人当たりの平均履修科目数は2.2科目となった。このうち1年次生である2015年度生は、両科目群でそれぞれ3科目、合計6科目以上の単位取得が卒業要件となった最初の学年で、1人当たりの履修科目が平均4.35科目となった。この数字は想定内であったが、2014年度以前の入学生である2～4年次生（合計2331名）も平均1.71科目と当初の予想を上回る多くの学生が履修した。2～4年次生にとっては、これらの科目群の科目も共通科目または自由選択科目として卒業要件単位に充当できるため、「日本国憲法Ⅰ・Ⅱ」を除いては前年度まで存在しなかった科目がカリキュラム表や時間割表に多く掲載されたため、必要上あるいは積極的に履修したと思われる。このため、1クラス当たりの平均履修人数は、235.5人となり、多人数クラスとされる300人以上履修のクラスは11クラスで、うちクラス分割の対象となる400～499人履修のクラスが3クラスになった。最多は「世界の地理Ⅱ-b」で、519人が履修した。しかし、次年度以降は、2014年度以前の入学生の履修は減少すると予測された。

新カリキュラム2年目の2016年度は、総学生数が前年度より169人少ない2827人となったが、逆に両科目群の履修学生数は7654人となり、1人当たりの平均履修科目数は2.7科目と増えた。2014年度以前の入学生の履修は、予想通り減少したが、2016年度生である1年次生が、前年度の1年次生より62人増えたのに加え、2015年度生である2年次生も両科目群で6科目以上の単位取得が必要であるため、多くの学生が履修したようである。また、1人当たりの平均履修科目数は、1年次生が前年度より0.9科目増えて5.25科目となり、2年次生は1.34科目増えて3.41科目である。3・4年次生は減ったものの、全学年の1人当たり履修科目数は平均2.7科目と前年度より0.5科目も増え、履修者数も両科目群で合計7654人となり前年度より1061人増えた。この結果、1クラス当たりの平均履修者数は273.4人で前年度より37.9人増加した。300人以上履修のクラスの数11クラスで前年

度と変わらなかったが、400～499人以上履修のクラスが1クラス増えて4クラス、500人以上履修のクラスが1クラス増えて2クラスとなった。最多はやはり「世界の地理Ⅱ-b」であったが、これも62人増えて581人となった。

1年次生の平均履修科目数が増えたのは、やはり、早い目に卒業要件をクリアしたい等考えがあったのだろう。これは、教務課の履修ガイダンスなどの影響もあるかもしれない。

②開講曜日・時程と履修者数の関係

両科目群の全28クラスの時程は、両年度で変化はなく、1時限が3クラス、2時限が2クラス、3時限が7クラス、4時限が15クラス、サマー授業が1クラスである。4時限が最も多くなっているのは、1年次生のカリキュラムで必修英語A、B、Cが、学科ごとに1・2・3限に月曜日から金曜日まで横並びに入っていることから、どの学科の学生でも両科目群の科目を選択できるように、過半数を4時限に配置したためである。この結果、4時限の授業は多人数クラスが多い。

例えば、前期の月曜4時限「日本の思想と文化」は両年度とも400人を超えている。この場合、同じ時程に「世界の歴史Ⅰ-b」があるにもかかわらずである。また、金曜4時限「日本の歴史Ⅰ-b」も429人の履修があり、そのうち1年次生が343人である。さらに、最多人数である「世界の地理Ⅱ-b」は木曜4時限で、この時間帯は、教授会や定例学科会、各種委員会が開催されるため専任教員による授業がなく、ほかに両科目群のクラスがないためと考えられる。後期木曜4時限の「世界の地理Ⅰ-b」も同様である。

一方、4時限以外で両年度にわたって300人以上を越えているのは、わずかに月曜2時限「日本の歴史Ⅰ-a」のみである。

③科目と履修者数

履修者数の多い科目の傾向としては、歴史や地理の科目である。特に日本史は、「日本の歴史Ⅲ-b」を除いてどれも多い。また、地理は日本、世界にかかわらず多い。これは、中学校の時の社会科地理的分野・歴史的分野、および高校の時に選択した科目の延長と捉え、理解しやすいと判断したためと考えられる。逆に、世界史は、高校で必修であったが、ほとんどが「世界史A」であり学習時間も少なく受験科目にもなりにくいいため、「大学で受講しても理解するのが難しい」という判断も働いたと考えられる。

一方、政治や法律、宗教などの公民的分野は、敬遠されがちのようである。例外は「日本国憲法Ⅰ・Ⅱ」で、2016年度は「日本国憲法Ⅰ」が439人である。日本国憲法が教職課程履修者にとって「66条の6」による必修科目になっており、1年次生には毎年度ほぼ100名の教職課程履修者がいるためである。

前述の「広島歴史と文化」は、ユニークな科目として多くの学生の履修を期待したが、2015年度が218人、2016年度が140人と思ったほど多くなかった。

4. 今後の予想と課題

前項①で述べたように、2015年度と2016年度を比較すると全体の履修者数が増えるとともに、1クラス当たりの履修者数も増えている。400人以上のクラス数の増加もある。

2017年度については、本稿執筆の現時点でまだ履修者数が確定していないが、両科目群の総履修者数が前期だけで4797人で、1クラス当たりの平均が342.6人、15クラス中10クラスで300人を超えている。「世界の地理Ⅱ-b」は586人である。「日本国憲法Ⅰ」は486人である。これは、2015・16年度と比較して大幅に増えていると言える。その原因は、2017年度生が807名と、新カリキュラム実施以降最高となったためであると思われる。

カリキュラム改革に先行して2014年度から実施された入試改革において、

戦略的な定員割れ策を取り入れ、定員850名に対し2014年度入学生は660名、2015年度は665名となったが、2016年度は727名、2017年度が807名と順調に回復している。この回復の原因については本稿で述べるのが目的ではないが、カリキュラム改革の成果もその1つと言われている。大学としての目標は当然、定員の850名以上への回復であり、したがって、来年度以降も本年度以上の入学生数が期待されている。

この想定に基づけば、来年度以降、300名以上の多人数のクラスはさらに増加すると予想されるが、多人数のクラスでの授業の困難さはこれまで指摘されている。すなわち、授業の統制がとりにくく私語等への対策が不十分になりがちであるだけでなく、授業形式が一方的な講義形式になりがちでアクティブ・ラーニングを取り入れた授業が難しいこと、このため学生の興味・関心を引いたり、思考させたりすることが難しくなることなどが生じる。

これらの問題に対する対策としてまず考えられるのは、履修人数の制限である。しかし、仮に、300名を限度として履修制限をしても、平均クラス人数300名を超えている現在において、その年度に履修できなかった学生は翌年度に履修するわけで、将来的に年々入学生が増えていくと仮定すれば、どこかで破綻してしまうだろう。

より有効な対策としては、クラス数を増やすしかない。現在でも、「日本の歴史Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、「世界の歴史Ⅰ・Ⅱ」「世界の地理Ⅰ・Ⅱ」は2クラスずつ開講されている。他の科目でも2クラスでの開講を検討すべきである。その際に問題になるのが、両科目群の担当者のうち専任教員と非常勤教員の割合である。現在、28クラス中14クラス（つまり50%）が専任教員の担当であるが、それぞれ学内で他にも多くの科目を担当していたり役職に就いていたりする者が多い。非常勤教員も本務校がある方がほとんどである。

ほかにも、科目を増やす方法なども検討されるべきだが、いずれにしても、多人数クラス対策は急務の課題である。